

年間第 16 主日

マルコ 6:30-34

2012 年 7 月 22 日

イエズス会助祭 小暮康久

今日の福音には、前半と後半で二つの大切なメッセージがあるように思います。まず今日の福音の前半部分は、ちょうど先週の福音の続き、つまり派遣から弟子たちが戻ってきたその場面から始まっています。二人一組で宣教の旅に派遣された弟子たちは、イエス様の下に戻り、それぞれ自分たちが体験した福音宣教の成功や失敗を報告したことでしょう。弟子たちのある者たちはその成功を得意になって話したかもしれません。またある者たちはその失敗をがっかりしながら話したかもしれません。しかし、イエス様はそんな弟子たちを分け隔てすることなく、一人一人に慈しみのまなざしを注ぎながら、彼らの成功も失敗もすべてを温かく包み込んで、彼らを祝福されたと思います。そして、弟子たちの話が終わると、イエス様は「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言って、弟子たちに休息を与えようとされます。この言葉にも、イエス様の弟子たちへの愛が溢れています。

宣教に派遣する際には、「杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たないようにしなさい」など、一見すると厳しい言葉を弟子たちに語っているようにも見えます。しかし、これもすべて、福音宣教の実現とは神の業の実現であることを弟子たちが体験するためでした。人間的な資質や能力、あるいは物質的な手段に頼るのではなく、ただ神様だけに頼る姿勢においてこそ、福音宣教が実現することを弟子たちに体験してもらいたかったからこそその言葉でした。言い換えれば、福音宣教の旅の中で、本当に父である神様を体験してもらいたかったからこそその言葉でした。

律法学者やファリサイ派の人たちと違って、聖書や律法についてほとんど学んだことのないような漁師や徴税人にすぎない弟子たちが、神様について人々に語るということが、当時の社会の中でどれほど奇異な目で見られたかは想像に難くありません。人々からは、「この無学な田舎もんが何を言っているのか」と初めは馬鹿にされたに違いありません。しかし、弟子たちが悪霊を追い出し、病人を癒したその「業」を見て、人々は驚愕し、弟子たちの告げる「福音」のメッセージに耳を傾け始めたに違いありません。弟子たちは、福音宣教の業が神様の業の実現であることを、そこで人々と共に体験したはずです。きっと弟子たちは喜びに満たされたことでしょう。イエス様は、「福音宣教において働かれる神の力」を弟子たちに身をもって体験させたかったのです。だからこそ、「杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たないようにしなさい」という言葉だったのです。

しかし、すべての場所でこのように成功したわけでもなかったでしょう。人々に馬鹿にされ、受け入れられず、人々の不信仰のゆえに「奇跡」もおこらず、がっかりと肩を落としてその町を去っていくということもあつたはずです。そんな時、弟子たちは失意のうちに自分の至らなさを責めたかもしれません。

これはある意味で、現代の日本の社会の中で、福音宣教の使命を生きるように派遣されている私たち一人一人とも似ています。私たちも、教会だけでなく、職場や学校、あるいは友人や知り合いとの関わりの中で、信仰を証するという機会が訪れることがあるでしょう。弟子たちと同じように、受け入れられることもあれば、馬鹿にされることもあるでしょう。ある意味で、福音宣教の使命を生きていくということは、このような喜びや失意の体験を繰り返していくことだとも言えます。

しかし、イエス様は、自分は何もしないで無理なことを命令する無慈悲な主人のようではありません。

私たちのありのままを受け入れて、私たちが福音宣教の中で出会うであろう困難や喜びのすべてを、そのままご自分の困難や喜びのように感じる、そんな主人です。また、疲れて福音宣教の旅から戻ってきた弟子たちを温かく迎え入れ、何よりもまずはゆっくりと休ませてあげたいと思う、そんな主人です。そこには福音宣教というご自分の使命と一緒に生きている弟子たちへのイエス様の特別な熱い思いがあります。

イエス様は、「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。」(ヨハネ 5:17)とおっしゃいます。イエス様も御父も「働かれる神」です。だから、「私に従いなさい」というイエス様の言葉には、「私と一緒に働いてほしい」という意味が込められているのです。神の国の実現のためにイエス様と一緒に働くということ、それは具体的な目に見える宣教活動ということだけではないでしょう。神様への愛を生きること、隣人への愛を生きることこそが、イエス様と一緒に働くということであり、福音宣教の使命を生きることだからです。例えば、困難に直面している人々に心を重ねて連帯すること、その人たちのために祈り、小さな愛徳の業を捧げること、あるいは愛のために耐え忍び、赦し、和解の道を歩むこと、あるいは、年をとって体を動かすことができなくなっても、そのありのままの自分で神様への賛美と感謝を捧げ、誰かのために祈り続けること、そういったことすべてがイエス様と一緒に働くということであり、福音宣教の使命を生きることなのです。そして、そんなふうにイエス様と一緒に福音宣教の使命を生きる小さな者たちを、イエス様がどれほど愛し慈しんでおられるか、それを今日の福音の前半の部分は描いていると言えるでしょう。

それともう一つ、今日の福音の後半の部分も、イエス様の愛がどのようなものであるかを示している大切な箇所であると言えます。弟子たちを休ませてあげたいと思ったイエス様は、弟子たちと共に舟に乗り、自分たちだけで人里離れた所へ向かいます。ところが、多くの群衆は彼らが出かけて行くのを見ると、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いてしまいます。イエス様は舟から上がると、すがるようなまなざしをご自分に向けている、この大勢の群衆を見て、その飼い主のいない羊のような有様に、深く心を動かされ憐れまれます。なぜ、群衆はこれほどまでに必至にイエス様を追いかけてきたのでしょうか。それを理解するためには、当時の社会の状況を知ることが助けになるかもしれません。

当時のユダヤ人のパレスティナ社会は人口の1%程度の支配階級が富の半分以上を得ているような搾取社会でした。基本的には人口の90%以上の人々が農業に従事するような「農民社会」だったのですが、ローマ帝国の支配の下で、貨幣経済が発展し、また、パレスティナなど属州での大規模農業経営への投機のために大土地所有制度が進んでいったために、多くの農民が農地(先祖からの嗣業の地)を手放し小作人や農奴に没落していきました。日々の食事にも事欠くような極貧者が溢れ、ある者は法律的な権利まで剥奪されるほどに完全に没落していきました。そのような人々は、律法を知らない、律法を守らない「不浄な者」「罪人」として、宗教的に差別され、排除されていったのです。当時「地の民」と呼ばれたこのような人々こそが、イエス様にすがるようなまなざしを向けていた群衆にほかなりません。彼らはまさに飼い主であるはずの宗教指導者たちから、差別され、切り捨てられ、散らされた羊たちだったのです。今日の第一朗読の「エレミヤの預言」が語る状況が、イエス様の目の前にひろがっていたということです。打ち捨てられたような毎日を生きていた彼らの目には、「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣い

ている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。」(ルカ 6:20-21) と語りかけるイエス様の言葉とその救いの業が、どれほどの希望として映ったことでしょうか。だからこそ、すぎるようにイエス様を追いかけてきたのです。

そんな彼らを見て、イエス様は深く憐れまれたのです。ここで「深く憐れみ」と訳されているギリシア語は *σπλαγχνίζομαι* (スプランクニゾマイ) という有名な言葉ですが、元々は「内臓」を示す「*σπλάγγχον* (スプランクノン) という名詞から生まれた言葉です。直訳すれば「はらわた (内臓) が動かされる」という意味になります。つまり、イエス様はご自分のはらわた (内臓) が動かされるほどに彼らを深く憐れんだということになります。それはただ単に頭で「かわいそうにと思う」というレベルではなく、「はらわた (内臓) がよじれ、かき回され、引きちぎられるような痛み、苦しみを覚えるほどに深く憐れんだ」ということです。実はこれとほとんど同じ言葉が沖縄の島言葉の中にあることをある時に知りました。それは「ちむぐりさ (肝苦りさ)」という言葉です。「肝が苦しい」という文字を当てるようで、その文字通りの意味から「私も胸が痛い」という意味を持つそうです。「人の痛みを自分のものとして胸を痛め、つらい思いをしている人を見ると自分も一緒に悲しむ」ということを示す言葉だそうです。人間の命の深いところでは、同じ体験があることを教えられたような気がします。

実はこの「はらわた (内臓) が動かされるほどに深く憐れむ」 (スプランクニゾマイ) というギリシア語は、ギリシア人の作った言葉ではなく、各地に離散しギリシア語を使うようになっていたユダヤ人たちによって作られた言葉なのです。ギリシア人にはこんな言葉は作ることは出来なかったでしょう。旧約聖書の民、ユダヤ人たちにとって、「内臓」は深い感情が宿っているところと考えられていました。ですからヘブライ語で「深い憐れみ」を示す *רחמים* (ラハミーム) という言葉は、「内臓」や「子宮 (胎)」を示す *רחם* (レヘム) という言葉から来ているのです。「はらわた (内臓) がよじれるほどでなければ、本当に憐れんでいるとはいえない」というのが聖書の民の体験の根底にあったということでしょう。そして最も大切なことは、この「深い憐れみ」を示す *רחמים* (ラハミーム) という言葉は、旧約聖書の中で 40 回使われているのですが、その多くが何よりもまず「神様の私たち人間に対する憐れみ」を示す言葉として使われているということです。聖書が語る神様とは、傍観者のように人間を「かわいそうに」と憐れむ神ではなく、「はらわた (内臓) が動かされるほどに深く憐れむ」神様、「私たちの痛みを自分自身の痛みと感ずるほどに深く憐れむ」神様だということです。ルカの放蕩息子のたとえの中で、ボロボロになって戻ってきた息子を遠くから見つけた父が、「憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。」という、この「憐れに思い」がスプランクニゾマイなのです。イエス様が私たちに示そうとされた父なる神の姿は、この放蕩息子の父のように、スプランクニゾマイの神だということです。そしてイエス様は、その御父と同じスプランクニゾマイの愛を生きていたということです。

今日の福音の前半では、福音宣教の使命に生きる私たちを、イエス様がどれほど愛し慈しんでくださっているかを見ました。そして後半では、そのイエス様と父なる神様の私たちへの愛が、「はらわた (内臓) が動かされる」ほどのスプランクニゾマイの愛であることを見ました。このように愛してくださる神様に信頼して生きていくことができるということは“なんと幸いなこと”なのではないでしょうか。これこそが「よい知らせ」＝「福音」に他なりません。イエス様と一緒にこの福音を宣べ伝える使命を生きていく恵みを、そしてその歩みの中で、私たちもスプランクニゾマイの愛を生きることが出来る恵みを、この御ミサの中で願ってまいりましょう。